

加島屋本宅再現模型の制作—建物の設計

はじめに

本稿は、加島屋本宅再現模型制作のうち、建物の設計に用いられた資料、設計の手順、完成した本宅模型の紹介を目的としている。加島屋本宅模型を設計するにあたり、復元の根拠にした主な資料を掲出しておく(表1)。加島屋の位置と間取りは、敷地絵図と平面図を基礎資料とした。また、絵画資料や古写真は建物の外観を再現する資料とした。

その他、江戸時代の大坂の町家資料(指図や見積)を参考にした。とりわけ住友家住宅の復元資料は貴重である¹。また、江戸時代の大坂を描いた絵画資料²、幕末から明治初期の古写真、幕末の三都(京・大坂・江戸)の風俗をまとめた『守貞謄稿』や『街廻り』³も参考になった³。さらに大阪くらしの今昔館の展示室に実物大で再現されている江戸時代の大坂の町家の設計情報など、今昔館に蓄積された大阪の町家研究の成果が、本設計の役に立った。なお、屋敷内での商い、接客、日常の暮らしなどの風俗考証は別稿(岩間香論文)を参照されたい。

1. 加島屋本宅の敷地

加島屋本宅が所在した玉水町は、中之島の南対岸、大川(土佐堀川)に北面し、町の東側には大川から分岐した西横堀川が流れている。同町には土地台帳である「水帳」が残っており、幕末における加島屋の敷地規模は不明であるが、他の文書や絵図から推定することができる。

すなわち、元禄15年(1702)の「玉水町納屋之絵図 加島屋久右衛門」(巻末図版頁の【史料4】)を参照のこと。以下、同様)に書かれた敷地規模によると、後に本宅となる屋敷地の寸法は、表口10間1尺と表口5間半の宅地を合筆した15間4尺2寸5分(101.75尺=30.83025m)となり、裏行は25間3尺(165.5尺=50.1465m)になる(江戸時代における大坂の土地の寸法は1間を6尺5寸で換算する)。

加島屋本宅の表通り(北浜川筋)の道幅は、同じ元禄15年「玉水町納屋之絵図」によると、東側が4間3寸、西側は4間半5寸あり、さらに雁木水叩きは東側2間5尺5寸、西側2間3尺7寸の規模であった。

加島屋本宅の宅地規模、表通りの道幅、土佐堀川の雁木の幅に関する幕末の資料は残っていないので、模型では元禄期の数値を援用した。なお、元禄期の絵図には、雁木の上にせり出した浜蔵や浜納屋、番屋、髪結床などの存在が確認できる。

	名称	資料番号・資料略称	年代	西暦	出典	所有・寄託
1	「玉水町納屋之絵図 加島屋久右衛門」	【史料4】	元禄15年	1702	廣岡久右衛門家文書	神戸大学経済経営研究所寄託 廣岡久右衛門家文書追7-2
2	「本宅絵図完」	【史料10】	天保11年	1840	大同生命文書	大同生命蔵/大阪大学経済史・経営史資料室寄託 A5-5
3	「西区土佐堀通寺丁目式番地五番屋敷建物」 「西区土佐堀通寺丁目浜四番地建物」	【史料14】	明治22年	1889	廣岡久右衛門家文書	神戸大学経済経営研究所 廣岡久右衛門家文書13-109-12
4	「西区土佐堀通寺丁目式番地建物図面」 「浜四番地」	【史料15】	明治前期		廣岡家久右衛門家文書	神戸大学経済経営研究所寄託 廣岡久右衛門家文書13-109-15
5	「大坂 かじ久」	絵画①	弘化4年	1847	『二千年袖鑑』	大阪くらしの今昔館蔵
6	「加島銀行」外観	絵画②	明治35年	1902	『大阪と博覧会』	国立国会図書館蔵
7	加島屋外観写真①	古写真①			大同生命文書	大同生命保険株式会社蔵
8	加島屋外観写真②	古写真②			廣岡家久右衛門家文書	神戸大学経済経営研究所寄託 廣岡久右衛門家文書8—54—1
9	「合資会社加島銀行本店」外観写真	古写真③	明治41年	1908	『開国五十年誌附録』	国立国会図書館蔵

表1 加島屋本宅再現の資料

【】の資料番号は巻末に掲載された絵図である。

2. 加島屋本宅の平面

基本資料とした「本宅絵図完」（以下、本宅絵図。図版は【史料10】参照）は、加島屋本宅の指図（平面図）で、同図が納められた桐箱の蓋裏に天保11年（1840）の年号が墨書されている⁴。本紙は東西が66.4cm、南北が103.8cmあり、図中に朱で方位線が描かれ、方位盤の裏に嘉永7年（1854）に大坂の家相家である松浦家によって鑑定がなされたことが記されており、江戸後期の加島屋の平面図である。図は1間＝6尺5寸を1寸2分に縮小した12分計で、約54分の1の縮尺率である。

本宅絵図には室名の書き込みがないので、他の大坂の町家絵図や文字資料を参考にして室名を推定し、図1に記載した（以下、本文に「」を付けた名称は絵図に記載されているものである）。

表棟は、門口を入った見世土間をはさんで上見世と下見世に分かれている。上見世の表通り側には出格子が設けられ、その奥（西側）に「土蔵」（表蔵）がある。土間を通り抜けると、中庭と玄関があり、格式の高い武家などを迎え入れる式台が設けられている。

その奥の建物には長大な台所土間が広がっている。土間に沿った床上は、内玄関、上台所、下台所と考えられ、上台所では土間に板間が張り出し、3つの焚口をもつ竈と「ハシリ」（流し）が据えられている。

台所土間は、妻側に大竈と7つの焚口をもった竈が据えられ、その奥に水壺、流し、水溜、井戸が置かれている。裏口を出たところは「風呂」と「湯殿」、そして便所が付属している。

本宅の西側に2つの座敷が張り出している。表の座敷（北）は2間半の「床」と「書院」を構えた17畳半と15畳の次の間、そして「仏間」のある8畳からなる。奥の座敷（南）は「床」と「地袋」を構えた8畳と6畳の次の間からなる。表の座敷は蔵屋敷の武家を迎える接客に、奥は内向きの接客に使い分けられた。

表通りに面した西半分は高塀で囲まれ、客門を入ると外露地には雪隠、四半敷瓦の土間と「床」のある3畳敷の待合がある。細い露地を進むと腰掛があり、その先は内露地

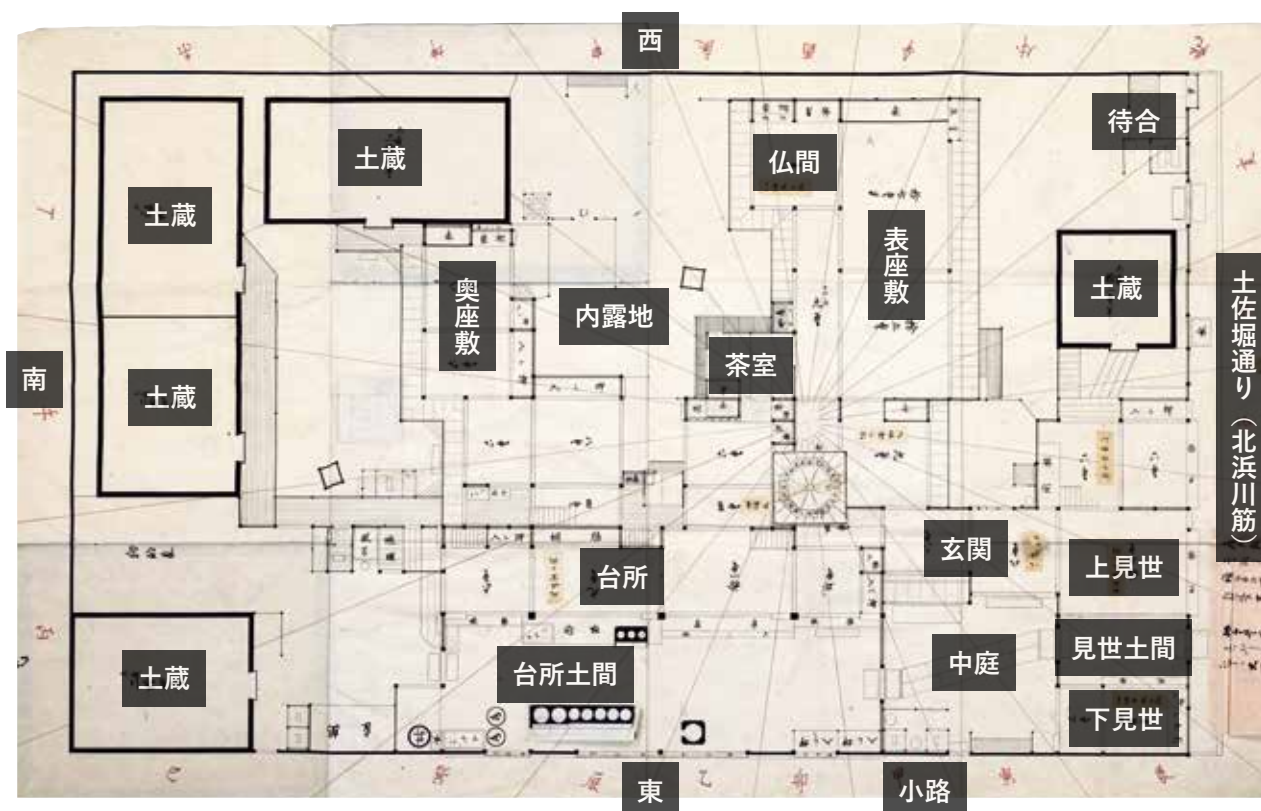


図1 加島屋本宅平面図（名称は推定）

になっていて、内門を入ると奥に 6 畳に「床」を設け、炉を切った茶室と、さらに奥に台目 2 畳の茶室がある。

敷地のいちばん奥の隣地境には、3 棟の「土蔵」と「白部家」が L 字型に配置されている。

本宅絵図には、柱の配置、部屋の規模（畳数）、板間（板の張り方）、床の間、床脇（地袋、棚）、付書院、水屋、押入、物入、膳棚、階段、台所設備（竈、井戸、水壺、ハシリ）、湯殿、風呂、便所（大便所、小便所）などが描かれている。柱間装置は格子、壁と敷居の区別、雨戸（戸袋）などの書き込みはあるが、建具は記されていない。

近代の本宅の略絵図は、明治 22 年（1889）作成の「西区土佐堀通壺丁目式番地五番屋敷建物」（以下、本宅略図①。図版は【史料 14】）と、同時期と推定される「西区土佐堀通壺丁目式番地建物図面」（以下、本宅略図②。図版は【史料 15】）がある。前者は屋敷の面積と地価を算定するために、建物の略平面と平屋建て、2 階建てなどの区別を書き、それぞれ坪数を記入している。後者は、1 階と 2 階に分けて建物の略平面と階段の上り口を描いて寸法を書き入れ、居宅、倉庫の別と坪数を記入している。

本宅略図①と本宅略図②を、江戸時代の本宅絵図と比べると、1 階平面はほぼ一致する。2 階の平面は本宅略図①と本宅略図②で違いがある。そこで、本宅絵図との整合性を取りながら平屋建てか 2 階建てかを判別した。ただ、奥の座敷は本宅略図①では「平屋造土蔵五坪」と書かれていて土蔵造りになっていて、江戸時代の本宅絵図の仕様とは合わない。これは書き間違いか、この座敷が近代になって建て替えられたのか、どちらかであろう。いずれにしても、本宅の復元設計には採用しなかった。土蔵は、本宅略図①によると、東南は「貳階造」、南と西南は「三階造」と記されており、表蔵は本宅略図①・②とも記述がない。

以上、本宅絵図を基本資料とし、本宅略図①②を参考に再現した加島屋本宅の建物は、2 階建ての表棟（見世棟）と 2 階建ての奥棟（台所棟・居住棟）を平屋建ての玄関でつなぐ表屋造形式であった。奥棟から表と奥の 2 つの平屋建ての座敷が西側に張り出し、土蔵は、東南は 2 階建て、南と西南は 3 階建てで、本宅略図にない表蔵は明治に撤去されたと推定される。

復元設計にあたって、基準寸法は 6 尺 3 寸 × 3 尺 1 寸 5 分の京間畳で、畳割制を用いて設計した。畳割は、畳寸法を基準にして住宅の平面（柱間寸法）を決定する技法である。これに対して柱の配置に合わせて畳を配する柱割では、部屋の形状により畳寸法が不均一になる。畳割はこの欠点を補うために桃山時代に始まり、江戸時代に茶室や数寄屋造りに採用され、上方を中心に普及した。標準的な柱寸法は 4 寸四方のものをを用い、土間には 8 寸四方の大黒柱を用いた。

3. 加島屋本宅の外観

加島屋本宅の正面を描いた江戸時代の絵画資料は、弘化 4 年（1847）新版の『にせんねんそでかがみ二千年袖鑑』（2 編 4）に掲載された「大坂かじ久」の挿図（図 2。以下、絵画①）で、「かじ久」とは加島屋久右衛門のことである。この絵は、幕末の大坂で活躍した絵師で風景画を得意とした松川半山の筆になり、タテ 7.0cm・ヨコ 8.4cm の小さな図であるが、建物の特徴が巧みに表現されている⁵。江戸時代に描かれた絵画はこれが唯一である。本図によると、表棟は 1 階に格子の大戸と 2 つの出格子が、中 2 階に虫籠窓があり、右手の屋根には忍び返しむしこまどが描かれている。また、表棟の向こうに奥棟の屋根が見える。これらは本宅絵図の情報と矛盾しない。

参考までに、大坂の町家の表構えを職種別に比較したところ、呉服屋、合葉屋、菓子屋などは柱間を開放的にして暖簾をかけて、往来から見世先が見える構造のものが多く

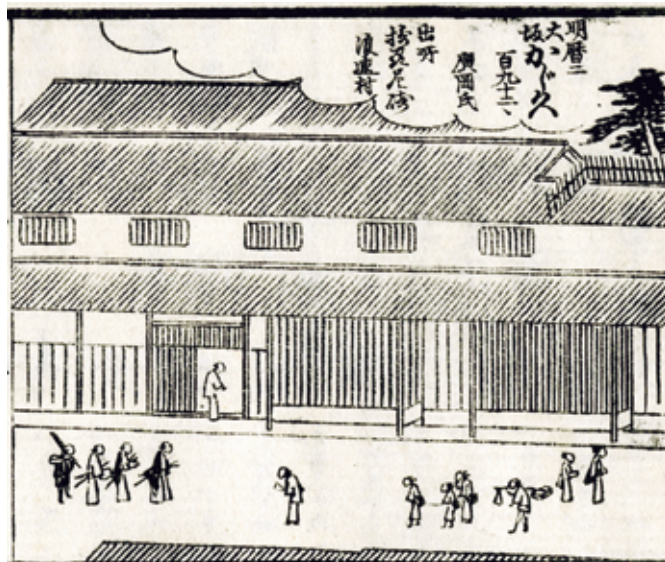


図2 絵画①「大坂かじ久」(『二千年袖鑑』)

が、金融関係の町家は、鴻池善右衛門家や十人両替の天王寺五兵衛家、平野屋五兵衛家などでは前面に紺の長暖簾をかけて室内が見えないようにしており、両替商の鴻池善五郎家、加島屋作兵衛家などは表に出格子を立てこみ、内部をうかがい知ることができない。加島屋久右衛門家も1階に2つの出格子を立てこんで閉鎖的な表構えにしているのは金融業者に共通する表構えであった⁶。なお、平面図には表棟の2階高さ寸法の記載はないが、絵画資料や写真資料によって中2階建てであったことが判明する。

明治以降の資料で本宅の外観が分かるものは、絵画1点と写真3点である。絵画資料は明治35年(1902)出版の『大阪と博覧会』に掲載された「加島銀行」の挿絵(図3。以下、絵画②)で、本宅の西北方向、肥後橋の上から見た加島屋本宅の外観と土佐堀川の護岸や雁木が描かれている。

古写真のうち、大同生命所蔵の写真(図4。以下、古写真①)は本宅の北西方向、明治21年に鉄橋に架け替えられた肥後橋の上から撮影されたもので、左下に「柳軒撮影」の文字が入っている。明治21年創業の「加島銀行」、明治28年創業の「加島貯蓄銀行」の看板がかかっていることも考えると、おそらく明治30年代の加島屋本宅の姿と推定され、土佐堀川の護岸が工事の最中である。前出の絵画②とほぼ同じアングルである。

神戸大学所蔵の写真(図5。以下、古写真②)は、土佐堀川の北側から本宅を撮影したもので、川を航行する蒸気船が写っている。入口の軒庇を切り上げ、虫籠窓が無くなっており、古写真①より後の姿である。

「合資会社加島銀行本店」写真(図6。以下、古写真③)は、『開国五十年誌附録』に収録された挿図写真で、古写真②の時期の外観であるが、東北方向から撮影されたため、前2者にはない情報がある。

以上、加島屋本宅の外観を絵画資料や写真資料から判断すると、表棟は1階に出格子、中2階に虫籠窓を付けた典型的な町家の表構えで、表棟につづく高塀には貴人口を設けていたことが分かる。表棟の向こうに高い屋根をもつ奥棟が建っている。また、古写真③から本宅の表棟の東妻が入母屋屋根であったことが確認できる。土佐堀川の護岸や雁木の古い姿は、絵画②「加島銀行」外観と古写真①から類推できる。

次に、もっとも情報量の多い古写真①を取り上げてさらに建物の細部を検討した。

屋根の形状については、表棟の東側は入母屋造り、西側に小棟が延長し、1階には瓦庇が付いている。瓦は庇を含めてすべて本瓦葺きである。高塀の屋根は^{こけら}棧瓦葺きで上に忍び返しを置き、貴人口の庇は柿葺きと判断できる。

奥棟は、本瓦葺きで、棟の上に火の見台が設けられている。通常は棟の一部を切り上げ

図3 絵画②「加島銀行」外観（『大阪と博覧会』）



図4 古写真①（大同生命保険株式会社蔵）



図5 古写真②（神戸大学経済経営研究所寄託）



図6 古写真③「合資会社加島銀行本店」外観



た煙出しが付くものが多いが、加島屋本宅では確認できない。奥棟の西側に本瓦葺きと
棧瓦葺きの2階が張り出している。

本瓦葺きの丸瓦は、表棟は58枚、奥棟は36枚を数えた。本瓦のピッチ（間隔）を9
寸（1間当たりの枚数から想定）とすると、棟の長さは表棟が約52.2尺、奥棟が32.4尺
になり、平面図の寸法と齟齬がない。

壁面の仕上げは、表棟の2階表側は塗籠、奥棟の妻面は塗籠及び豎羽目板張り横棧
押えである。

表の出格子は格子の太さが2種類に分かれ、向かって左側は見付2寸、総数28本、
右側は見付1寸2分、総数49本の縦格子からなる。

表棟の柱間装置における内法寸法を5尺8寸と設定し、それと合わせて人物などの高
さから表棟の屋根の棟瓦天端及び軒先の高さを推定し、瓦葺きの納まりなどから階高は
約20尺（棟木天）、軒庇の高さは約15尺（桁天）、屋根勾配を大屋根5寸とした。同
様に庇についても天端を10尺3寸、下端軒先を7尺9寸、勾配を4.5寸とした。高塀の
高さは14尺を計測した。

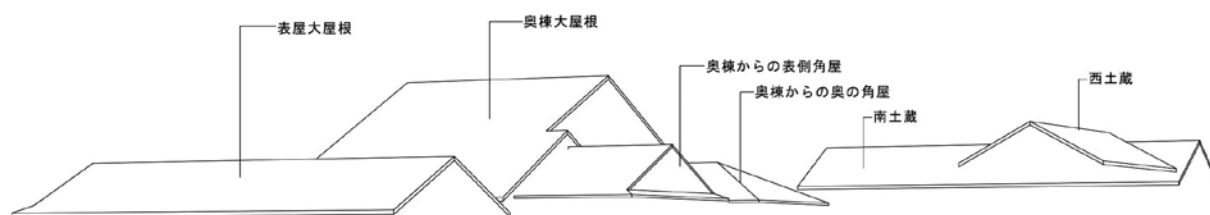
ここで古写真①から撮影位置を確定し、CADにおいて写真のアングルを同定した。ま
ず、平面（配置）図から想定される屋根形状の位置を図面に落とし、写真上の明らかに
同一垂直線上の2点と判断される個所を、数か所選んで平面上でそれを結び延長させた
交点が撮影場所となる。逆にこの撮影位置から、写真の中の判然としない部分を平面上
で特定した。

次に、これまで平面寸法や垂直寸法を確定した数値により、CAD上で透視図を立ち
上げ、写真と透視図との整合性を確認して写真上のポイントの同定を行った（図7）。これ
により、屋根勾配の修正や棟の長さを決定することができた。すなわち、奥棟の高さ（棟
木天）は約34尺、屋根は5寸勾配、さらに、大屋根の棟の長さが東側の小路まである
と考えると、丸瓦の枚数を計測した時に寸足らずになるので、東に半間幅の下屋があると
判断した。

また、西側の土蔵は、かすかに棟の鬼瓦が見え、棟高さが28尺8寸、そして奥の土
蔵は棟高さが27尺6寸を計測した。明治の本宅略図①では、この2棟の土蔵は3階建
てになっているので、棟高を考え合わせると、3階の室内は天井がなく、棟までの高さが
低い構造になっていたと推定した。

4. 加島屋の室内空間

見世の間、台所、表座敷、奥座敷、茶室は、模型の屋根や壁を外して室内を見せる展
示を行った。それぞれの室内の床高、内法、天井高、壁の仕様、間仕切り装置、畳の敷
き方、板床の仕様などをまとめた。



平面図に想定した高さを与えて、CAD上でパースペクティブに作図した。
古写真のアングルと同じ位置を検討しながら、建物の高さや形状を確認決定した。

図7 CADによる屋根構成検討図

(1) 見世

表棟の1階は床高1尺5寸、内法5尺8寸、2階床高まで8尺とし、天井高は7尺7寸とした。入口の土間は三和土、床上は畳敷きとした。

上見世の裏の6畳に2階にあがる階段があり、2階は外観から中2階と判断できるので、天井がなく屋根裏がそのまま露出した低い2階（ツシ2階）で、2階床から棟木天までの高さは10尺5寸とした。ここは住み込みの丁稚の寝部屋であった。

(2) 台所

本宅絵図によると、台所は床上の台所と台所土間とに分かれている。両者の境目には3間の間隔で8寸角の太い柱（大黒柱）が3本立ち、柱の位置に合わせて上部は3間梁でつないでいる。さらに表と奥の柱の間をそれぞれ2間梁でつなぎ、全体で奥行10間の長大な母屋を構成している。3本の大黒柱の上部から桁行方向に梁を渡して妻の柱と緊結し、さらに梁行方向に3本の梁を渡して軸部を固めている。梁の上には束を立てて十文字に貫を入れて緊結し、束の上部に母屋桁を渡して、巨大な屋根を支えている。台所土間には天井がなく、屋根裏まで吹き抜けた巨大な空間が出来上がる。大坂ではこの空間は「火袋」と呼ばれることが多い。なお、台所土間の棟に煙出しを設けることが多いが、加島屋は『二千年袖鑑』の挿絵や古写真では煙出しが確認できない。そこで東面の妻壁に煙出しの窓を設けた。

一般に、江戸時代の建物は幕府の作事禁令によって規模や様式が制限されている。有名なものは、幕府の梁間3間梁の制限である。しかし、民家では在方の農家に対するもので、元禄3年(1690)の触書でも「地子御免之町屋ハ古来之通不及申来」と規定されている(中井家文書)。従って、地子を免除された大坂の町方では、梁間10間という大きな梁間も、加島屋のような大店には許されたと考えられる。

台所土間は三和土とし、竈、流し、井戸、水溜が設置されている。竈は焚口がひとつの大竈と焚口が複数ある竈(3つ竈と7つ竈)とがある。竈の形は天保6年(1835)刊の『街廻嚮』に掲載された大坂の竈の図を参考にした(図8)。また幕末の風俗を記した『守貞謾稿』によると、台所土間の竈は「へっつい」あるいは「へっつい」と呼ばれ、その色は黄で、「竈口の前および竈底等平瓦を敷く。竈口の周りもまた瓦を用ふ」と記され、同じく図が載せられている。竈口の数が5つのものは「五つへっつい」と呼ばれたとあるので、加島屋では「三つへっ



図8 大坂の竈図(『街廻嚮』所収)

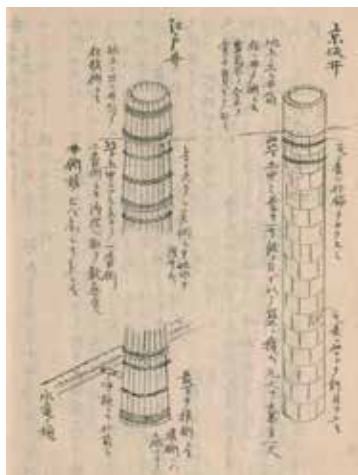


図9 京坂井と江戸井(『守貞謾稿』所収)



図10 流しと竈(『大和錦女教訓草』所収)



図11 台所の図(『都鄙安逸伝』所収)

つい、「七つへっつい」と呼ばれていたのであろう。また、大竈は上に三宝大荒神の竈神さんぼうだいこうじんをまつり、釜の上に高さ5～6尺(1.5～1.8 m)もある松を飾り、桷を添えて荒神飾りとしたと記されている。井戸は、『守貞謄稿』に京坂の井戸と江戸の井戸の違いが紹介されており、挿絵(図9)を参考にして井筒(井戸側)を設計した。

他に、流しなどの水廻りは、天明8年(1788)に大坂の柏原屋清右衛門が出版した『女大学』に初出の町家の台所(図10。『大和錦女教訓草』やまとにしきおんなきょうくんぐさ、明治14年板掲載)や、天保4年(1843)序の『都鄙安逸伝』とひ あんいつでんに掲載された台所の図(図11)を参考にした。後者は、大坂の浮世絵師・暁鐘成の筆になるので、リアリティが高いものと思われる。

(3) 座敷



図12 「蘭亭曲水図」襖(大阪くらしの今昔館蔵)

表の座敷は17畳半の規模で、正面に2間半の床と付書院が設置されている。室内の内法は5尺8寸、鴨居上に箴欄間おざらんまを設け、天井高さは8尺5寸とし、床框は高さ3.5寸、書院の出は1尺5寸とした。壁は朱色の大坂土を用いた。この座敷は正式の座敷なので天井は格天井とした⁷。また、次の間や仏間、そして畳廊下との境は襖が嵌められているので、ここに絵襖を使用した。絵襖の

図は、大阪くらしの今昔館が所蔵する、江阿弥筆「蘭亭曲水図」襖(図12)と、中井藍江筆「林和靖図」襖を用いた(岩間香論文 p.27~28 参照)。

奥座敷は8畳の規模で、内法5尺8寸、鴨居上に障子欄間を設け、天井高さは8尺5寸とし、床框は高さ3.5寸とした。壁は表座敷と同じく朱色の大坂土を用いた。この座敷は内向きの接客座敷なので、天井は棹縁天井、建具は、次の間との境は襖、縁との境は腰障子とした。

なお、表と奥の両方の座敷は、幕府の作事禁令に上げられている、長押や張付壁などの贅沢な仕様は取らなかった。

(4) 茶室と茶庭

加島屋本宅には、2つの茶室が確認できる。6畳の茶室と、台目2畳の小間の茶室である。

2つの茶室ともに縁が回るが、絵図の表現が異なるので、6畳茶室は六角材のナグリ仕上げを編んだ事例があるのでそれに倣った。台目2畳茶室は割竹敷きの縁とした。室内は、6畳茶室は絵図の表現から、畳5畳に原叟床(1畳分の板の上に柱を立て床を設ける)からなると判断した。縁を介して踊り口から茶室に入る事例があることから、踊り口の敷居成を4寸とし、開口の成を普通より高くするかたちとした。また隣接する6畳間との境は建具の表示がされているが、出入口とすると茶事に支障をきたすので、ここは窓(丸窓)とした。床の間の横も窓(引き違い障子)とした。入側縁からの開口部は水屋の位置などから茶道口と想定した。内法寸法は5尺とし、天井高さは7尺を最大とした。屋根は柿葺きとした⁸。

茶庭は、待合、腰掛、雪隠などが本宅絵図に描かれている。待合は台目3畳床付で腰掛及び雪隠を併設し、屋根は柿葺きとした。腰掛は隣地境の杉皮張塀に沿って設けられ、片流れの柿葺きとした。近接する雪隠は杉皮葺きの片流れとした。さらに杉皮大和葺きの中門をへて内露地に入る。

本宅絵図には、茶室の前に井戸を描いている。大同生命大阪本社ビルの地下に、加島

屋久右衛門家から寄贈された井筒（井戸側）が保存されている。これは秀吉の伏見御殿にあったとの伝えがあり、豊臣家ゆかりの桐の紋が陽刻されている。何度も移設されていて、江戸時代には三香菴の敷地にあったようだが⁹、今回の模型制作にあたって、本宅の茶室の前に置いた。

5. 付属の建物

土蔵は、本宅略図①では、東南の蔵は2階建て、南の蔵と西南の蔵は3階建てと記され、表蔵は記載がなかった。東南の蔵は通常の2階蔵とし、棟高さを25尺1寸とした。3階建ての蔵は、古写真①から計測したところでは、西の土蔵（25畳）の棟高さは28尺8寸、奥の土蔵（24畳+30畳）は棟高さが27尺6寸としたことから3階は通常より低い、中3階建ての土蔵とした。なお表蔵は古写真に写っていないので、近代になって取り壊されたと考え、一般的な2階建てで復元した。江戸時代には幕府から建築に関する禁令が出され、その中で3階建ての土蔵は贅沢にあたるとして禁止されていた。加島屋は中3階建ての土蔵を造ることで、禁令から逃れたのではないだろうか。



図13 「京坂土蔵図」(『守貞謄稿』)



図14 「大坂浜蔵之図」(『守貞謄稿』)

土蔵の外観は、住友家の地壳土蔵立面図を参考にした¹⁰。また、『守貞謄稿』に「京坂土蔵図」(図13)と「大小アリト雖トモ其製如此也、屋根必ズ本葺、鬼瓦ニ鬼面ヲ用ヒ、鉢巻狭ク、折釘ヲ打ズ、窓片扉」と解説されており、これらを参考にした。

いずれの土蔵も、加島屋の家宝や道具類、米などを収納するもので、壁面全体が漆喰塗の防火構造になっていた。このことで火災から収納品を守ることができ、また大火の時には防火壁になって、隣地からの延焼を避ける効果があった。なお、敷地の裏には背割下水があり、東から西に向かって流れていた。その断面形状は発掘の成果を参照した。

一方、加島屋の表を通る土佐堀川通りと浜地、そして浜蔵・浜納屋に関しては、元禄

15年「玉水町納屋之絵図」(前出【史料4】)に書き込みがあり、表通りの幅は東側が4間3寸、西側は4間半5寸、雁木水叩きは東側2間5尺5寸、西側2間3尺7寸の規模であった。加島屋に関する資料はこれだけであるが、住友家資料に「在来石垣之図」¹¹があり、同家の本宅が所在した長堀の護岸と雁木の姿図が描かれている。この図を参考にして、上記の寸法と、「加島銀行」挿図や古写真①をもとに浜地と雁木を再現した。

浜蔵・浜納屋について、『二千年袖鑑』(絵画①)の画面下に描かれた棟が食い違った屋根は、浜地に建てられた浜蔵と浜納屋の屋根と考えられる。一方、本宅略図②では浜地に間口11間2分5厘、奥行2間の長大な建物の略図が描かれ、「厩」と記載されている。再現模型では、前者の資料に描かれた異なる棟の高さの建物に着目し、1棟ではなく2棟と考えて、浜蔵と浜納屋を想定して設計した。浜蔵の土台と雁木は、『守貞謄稿』の「大坂浜蔵之図」(図14)と「土蔵下ヲ石柱ヲ建、石土台ヲ居テ其上ニ土蔵ヲ建ル也」「土蔵間ニ描ク河ニ下ル路ヲ坂俗ハ雁木ト云」と解説されているのを参考に設計した。

風呂に関して、大坂の町家では内風呂が広く普及しており、その大半は五右衛門風呂であった。しかし、本宅絵図には風呂の外に小さな円形の焚口が描かれている(図15)。これはエドワード・S・モースが著した『日本人の住まい』(1885年初版)に掲載された、

外部に熱窯のある浴槽とその形状が酷似している（図 16）。モースはこの浴槽を非常にすぐれたものとして、次のように紹介している。

このような浴槽では、浴槽の外部に両端を閉じた小さな木樽そっくりの装置が取り付けられている。この装置を突き抜けて銅製の円筒が通っており、この内部で木炭を燃やす。この装置は太い竹筒で浴槽に連結されている。この竹筒の浴槽内の部分に小さな四角形の戸が付いていて、湯の温度が上がりすぎると入浴者がこれを閉じられるようになっている。多くの場合、焚き口から出る煙に悩まされないように天蓋が工夫されている。これらの浴槽は広い板の間に置かれるが、その床面は中央部の排水溝へ傾斜をなしている。この板張りで入浴者は、別に手桶に汲んだ湯で身体をごしごしこすって洗う。もちろんこれは文字通りの「入浴」、つまり湯に浸かってからのことである。浴槽内の湯はかなり熱く、外国人は我慢できないほどである。（斎藤正二・藤本周一訳）

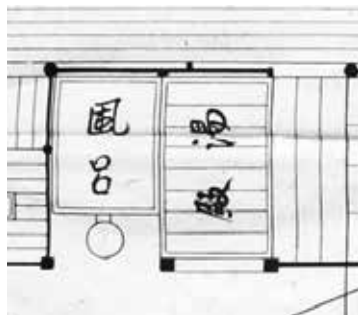


図 15 風呂と湯殿（本宅絵図：部分）

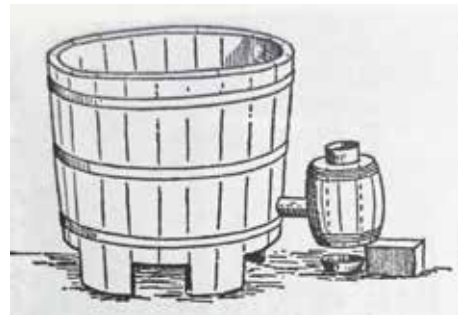


図 16 子持風呂（『日本人の住まい』）

一方、日本側の資料では、『守貞謄稿』にも次のような記述がある。

桶風呂の側に鉄をもつて小桶を釣り、小桶中に銅壺を設け、炭を壺中に焚くに小桶中の水は沸湯となる。その小桶より細き銅樋を大桶中に通してわかすもあり。号して子持風呂と云ふ。これは文政末比よりの新製なり。

加島屋の本宅絵図に描かれた円形の焚口を持つ風呂はまさしく子持風呂で、本宅絵図の天保年間より一代前の文政末年頃に登場しているので、加島屋は最新の風呂を導入していたことが分かる。

火の見は、古写真に物見台と長大な梯子が写っている。火の見る規模については住友家資料に見積書¹²があり、火の見台は1間半四方に折廻りの手摺が付き、火の見への伝いは幅が半間で両脇に登り手摺付きであった。加島屋の火の見は古写真①でかなり詳細に分かるので、火の見台は1間四方とし、四方に手摺を付け、伝いは幅半間で両脇に登り手摺を付けた。

6. まとめ

以上、加島屋本宅模型の建築の再現過程について論じてきた。近年、「京町家」がマスコミで話題になっているが、同じ上方でも、大阪の町家に注目されることはきわめて稀である。それは、戦災や高度経済成長期の都市開発によって町家の遺構がほとんど失われたことと、町家の資料が散逸し、まとまった研究が少ないことが主な要因である。筆者らは、大阪くらしの今昔館の展示室で、天保時代の大坂の町家を実物大に再現し、その後も、大阪の住いや建築に関する情報を収集し、展覧会を開催してきた。今回、加島屋本家である廣岡久右衛門家（大同生命保険株式会社所蔵と神戸大学経済経営研究所寄託）の資料によって、模型ではあるが、江戸時代の大坂の町家を再現したことにより、さ

らに新しい研究の可能性が開けてきたと考えている。この報告がその一歩となれば、筆者らの望外の喜びであることを記して本稿のまとめとしたい。なお、図版の出典は注記の通りである¹³。

(谷 直樹・松本正己)

-
- 1 『「住友長堀銅吹所と住友家住宅」の設計と演出—住友有芳館歴史展示模型—』（住友史料館刊、1998年）。建築の復元は谷直樹・松本正己、情景の再現は今井典子が執筆。
 - 2 「浪華下村店繁栄之図」（大阪くらしの今昔館蔵）、『摂津名所図会』など。
 - 3 『守貞謾稿』は江戸時代後期の三都の風俗、事物を説明した風俗誌。著者は喜田川守貞。起稿は1837年で、約30年間書き続けて全35巻が完成した。『街廻嚀』は平亭銀鷄作、歌川貞広画で天保6年（1835）刊行。
 - 4 この桐箱には4枚の絵図が収められていた。他の3点は、「三香菴絵図」、「幸町三丁目別荘絵図」、そして無題の某屋敷絵図である。
 - 5 『二千年袖鑑』は天保15年（1844）版を出版後、弘化4年（1847）、嘉永2年（1849）、同5年に3冊本として増補出版された。松川半山が描いた挿絵の中に大坂の商家が多数掲載されている。絵の信憑性はかなり高いとの研究が出ている。谷直樹『「二千年袖鑑」にみる幕末の大坂の町家』（大阪市立住まいのミュージアム研究紀要、15号、2017年）
 - 6 谷直樹『「二千年袖鑑」にみる幕末の大坂の町家』（前掲）
 - 7 明治42年発行の大同生命「社報」第9号に掲載された、社長の廣岡正秋（9代久右衛門）の訃報記事の中に、「玉水の同邸には藩侯臨御に備ふる為め御殿作の別宅迄作られてあつたのである」と記されている。この「御殿作の別宅」は本宅の隣に建てられた三香菴のこととであるが、本宅の表座敷もこの記事を援用して御殿造りと考え、天井は格天井とした。
 - 8 茶室の復元は矢ヶ崎善太郎氏のご教示を得た。記して謝意を表する次第である。
 - 9 同上「社報」の三香菴の記事に「その庭前の手水鉢は、桃山御殿にて太閤秀吉公所用なりと言ふ」との記載がある。
 - 10 前掲『「住友長堀銅吹所と住友家住宅」の設計と演出』
 - 11 前掲『「住友長堀銅吹所と住友家住宅」の設計と演出』
 - 12 前掲『「住友長堀銅吹所と住友家住宅」の設計と演出』
 - 13 図1：加島屋本宅平面図（大同生命蔵）／図2：「大坂かじ久」（『二千年袖鑑』所収、大阪くらしの今昔館蔵）／図3：「加島銀行」挿図（『大阪と博覧会』所収、国立国会図書館デジタルコレクション）／図4：古写真①（大同生命蔵）／図5：古写真②（神戸大学経済経営研究所寄託）／図6：古写真③（『開国五十年誌付録』、国立国会図書館デジタルコレクション）／図7：CADによる屋根構成検討図（松本正己作図）／図8：大坂の竈図（『街廻嚀』所収、大阪くらしの今昔館蔵）／図9：京坂井と江戸井（『守貞謾稿』所収、国立国会図書館デジタルコレクション）／図10：流しと竈（『大和錦女教訓草』所収、国立国会図書館デジタルコレクション）／図11：『都鄙安逸伝』（立教大学図書館蔵、新日本古典籍総合データベース）／図12：蘭亭曲水図（大阪くらしの今昔館蔵）／図13：「京坂土蔵図」（『守貞謾稿』所収、国立国会図書館デジタルコレクション）／図14：「大坂浜蔵之図」（同上）／図15：風呂と湯殿（本宅絵図：大同生命蔵）／図16：子持風呂（E・S・モース『日本人の住まい』所収、斎藤正二・藤本周一訳、1991年、八坂書房刊）



全景



正面